

幸せの「モデル」チェンジを

なかむら
中村

ゆずる
譲

日本教職員組合・中央執行委員長

IT先進国シンガポールには、国策として最優秀な理数系科学者・医学者・研究者が集められているという。研究費は上限が無いくらい恵まれている。1億円、2億円の研究用機器を研究者の判断で購入できるという。しかし2年間で「成果」をあげられなければお払い箱となってもいい「契約」だそうである。「競争と成果」の世界。一方で、世界の富が集まった中東の砂漠の人工都市ドバイには、新自由主義経済の世界的破綻で職を失った労働者の寝転ぶ姿が映像に映し出される。ドバイはそのままバブルの「砂上の楼閣」と化するのか。

日本の教育の世界では、テストによる「競争」とその「成果」としての点数と偏差値による順位づけが激しさを増している。中高一貫の進学私立学校、負けてはいけないと公立高校の後追い。大手学習塾の参入。高学歴 高収入 ゆたかな生活 幸せな人生という「古い成功モデル」に子どもたちを追い込む日本の教育の「競争と成果」の現実。

しかし、もう一つの現実が日本と世界にはある。調査を紹介しましょう。07年のユニセフの「幸福度調査」。日本の子どもは「自分は孤独だと感じるのは30%。3人に1人の割合。24か国中で断然トップ。次いで多かったアイスランドが10%。10人に1人」。日本が断然トップ！です。「自分は不器用だと思うが18%。2位のオランダが7%」これも断然トップ！。「学力世界一」と「孤独感世界一」が並存する日本。

世界では、ストリートチルドレンや児童労働、児童売春のために、またHIVエイズを発症したり、少年兵士に駆り立てられて、7500万人の子

どもたちが学校にいない現実。読み書きができない人々が7億7600万人もいる世界の現実。そしてその3分の2が女性である現実。

優秀なエリートが社会をリードすれば持続する成長社会になり、平等に幸せが訪れる？本当か。市場原理主義の哲学と確率論でコンピューターを駆使した優秀な頭脳集団は平等な社会をつくりだしたか。アメリカ版グローバル資本主義を信奉し「格差と貧困」の社会をつくりだした学者と政治家。日本の公教育は「悪しき平等主義に陥っている」と批判し、「改革」「改革」を叫んできた保守政治家。彼らこそ自分の頭でモノを考えずに、レーガン、サッチャー、ブッシュの受け売り哲学・政策を振り回した。受験のための学力は剥落学力である。受験が終わればほとんどの「暗記型知識」は剥がれ落ちる。そんな「知識」を頭いっぱい詰めて込んで人は幸せになるのだろうか。自分で迷いながら悩みながら考えた自ら「学ぶ力」が社会に出たときに生きた学力になる。そのことをおとなは皆、経験的に知っている。競争原理は必要であっても、価値順位1位に置くべきではない。とりわけ教育領域にはなじまない。幸せのための新しい「成功モデル」を考える時がきた。「モデル」をチェンジしなければならない。

19世紀の北アメリカ先住民クリー族の警句を紹介しましょう。

最後の木が死に、最後の川が毒され、最後の魚を獲り終えたとき、人はようやくお金は食べられないと気づくのだ

私たちは「成長」したか。